

巻頭言

2008. 3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

入試雑感

茗溪塾塾長 宇野雅春

春の気配が色濃くなって来ましたが、明るい華やぎの反面、花粉が飛び交う憂鬱な季節の到来となっています。まだ大学受験は私立の後期、国立の後期を残していますので入試が全て終わったとは言えない時期ですが、おおかたは終了したということと、次の学年が受験に向けてスタートを切っている時期ですので、記憶に新しい内に、今年度の入試を振り返ってみたいと思います。何もかもが「前倒し」の時代です。就職活動が大学3年生の11月頃から始まるのと同じように、大学受験も、9月頃からAO入試や推薦が始まり早い生徒は、10月頃に既に入試が終わっている状況です。1月のセンター試験から3月初旬まで推薦から始めた生徒は6ヶ月間も合否のせめぎ合いにさらされることとなります。この前倒しの傾向は、中学入試や高校入試にも反映されていて、正月明けと同時に受験が始まり、中学受験は約一ヶ月、高校受験は約2ヶ月の長いスパンで入試が続きます。合格した生徒を横に見ながら、あるいは進路が決まってすっかり受験モードから抜けてしまった友達に囲まれながら、それでも、合格が決まるまで努力をつづけなければならないという困難な状況が生まれてきています。入試の多様化は、それ自体悪いことではないのですが、結局は運不運も含めた新しい「困難」を生み出しているように思えます。

「大学入試で見えてきたのは、或るレベル以上の希望校に必ず合格しなければならない受験（東大とか医学部等）と同じ学部でも大学によってレベル差があったり、いろいろな大学いろいろな学部をレベルに幅を持たせて受験していく受験の2パターンを区別する必要性です。この2パターンにどう作戦を立てて取り組むかということが重要ということ。特に前者は、準備段階で、本人の実力ともあわせながら、綿密な指導力が要求される受験になるという点で、予備校が果たすべき課題が大きいと思います。AO入試や推薦入試での小論文や出願作文などの指導の重要性も含め旧来の予備校ではできなかった部分を考えると、まだまだ改善できる可能性があります。今年の経験を今後の実践に活かしていきたいと考えています。後者はセンター利用も含めてほぼ確立してきている状況ですが、本人の自覚をどう作るかにまだ課題があると思います。

中学入試は、受験者数の増加で、昨年に続き厳しい入試ではありましたが、塾のレベルに規定されている感を強くもちました。入試レベルを外さずに最後まで努力すれば、或る程度までは必ず合格できるということです。ただし偏差値が50を越える学校については、本人の自覚に基づいた努力がないと、「厳しい」という印象です。まわりに尻をたたかれながら、気乗りのしないまま勉強するというのでは届かないレベルになっているということです。本人の「やる気づくり」の必要を更に強く感じました。

今年、塾として大きく飛躍したのが高校受験でした。合格実績は各レベルでそれまでの実績の3倍～5倍の結果が出ています。これは教務改革や各教室のクラスリーダーの成長もさることながら、受験のチームに関わる先生方のすさまじい努力の成果だったと思います。「合同特訓」や「夏期合宿」そして「短期集中特訓」での先生同士の交流や生徒同士の交流も受験に勢いを与えた筈端と考えられます。特に特進のみならず選抜クラスが多く参加した合宿、先生方が睡眠時間がほとんどとれなかった激務の合宿でしたが、閉会式での熱い交流は今でも忘れられません。受験の最中も教室を越えての生徒同士の励まし合いが印象に残りました。「つながりが人を育てる」ということを強く実感した年でした。

正月開けてからのあわただしい日々を早朝から深夜までもともに駆けぬいてくれました全ての講師の皆さん、ありがとうございます。そして塾を信頼して、見守って下さいましたご父母の皆様には、不十分をお詫びしつつあらためて感謝の念をおくります。

そして何よりも今年強く実感したのは、生徒の合格の報が私たちの背中を大きく押してくれているということです。どんなに落ち込んでいるときにも、どんなにくたび果てているときでも、君らの合格が私たちの気持ちを奮い立たせ、引き上げてくれるということを本当に強く強く今年は感じました。結果が残念だったのに卒塾式には来てくれた君にもお礼をいいます。失敗を糧に一回り大きくなって次にチャレンジしてほしいと思います。

新学期がスタートしています。ここからの一年は、再び辛く長い日々ですが、ともに喜び合えることを信じて、次に進もうと思っています。